

大学生のキャリア成熟に関する縦断的研究（Ⅰ）

松 井 賢 二

1. 問題と目的

大学におけるキャリア教育の必要性が唱えられて久しい（松井，2004）。その必要性を裏付けるために、我々の研究グループは、卒業生を対象に大学生の就職活動の実態を調査した（松井・近藤・山岸・五十嵐・高橋・森下，2005）。

さらに、松井（2006）は、大学卒業後の明確な見通しを持たずに、希望職業も未決定のまま「とりあえず」入学してきている学生が約4人に1人、と比較的多いこと（教育学部のゼロ免課程の場合）、そして、学年進行に伴って、希望職業を決定している学生の占める比率が低下するという傾向があることを明らかにした。

ところが、この研究結果は横断的調査で収集したデータに基づいて分析した結果であり、縦断的調査による分析結果ではない。当然のことながら、一人の大学生を入学時から追跡し、縦断的にデータを収集した上で、分析することが必要である。

またこれまでに、大学生を対象としたキャリア教育関連の授業が実践され、それぞれの側面から効果測定がなされてきた（森山，2007；安達，2006；松井，2008；三川，2008；松井，2009a；松井，2009b；江利川，2012）。しかし、これらの研究では、大学生のキャリア意識、とりわけキャリア成熟に関する変容を実証的に調査研究し、その結果を十分考慮に入れ、キャリア教育関連の授業実践プログラムを開発してきているとは必ずしもいえない。

そこで、本研究においては、縦断的調査によって大学生の希望職業の選択状況を把握するとともに、キャリア成熟の程度がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とする。同時に、これらの研究結果から、今後の大学4年間のキャリア教育実践プログラムを開発するための基礎データを収集したい。

2. 方 法

(1) 調査対象・時期・方法

2008年度入学の大学1年生で教職科目の受講生を対象に、「1年次調査」を2008年5月に実施した。全回答者数は、463人である。

またその中から調査協力者を募って、翌年の2009年12月に、追跡調査として「2年次調査」を実施した。有効回答者数は117人（男性36人、女性81人）である。

(2) 調査内容

1年次調査と2年次調査の両方において以下の内容について調査を行った。

1) キャリア成熟

大学生が自分のこれからの人生や生き方、あるいは職業選択や就職などについて、どの程度成熟した考え方を持っているかを測定するために開発されたキャリア成熟尺度、すなわち、「キャリア・レディ

ネス尺度（Career Readiness Scale：略称CRS）」（坂柳，1996）を用いた。

この尺度は、キャリア概念の多義性や広がりなどを考慮に入れて、①人生キャリア・レディネス（主として、人生・生き方への取り組み姿勢）、②職業キャリア・レディネス（主として、職業選択や職業生活への取り組み姿勢）、という2系列のキャリア・レディネスを設定している。

また、それぞれについて、「関心性」（自己のキャリアに対して、積極的な関心を持っているか）、「自律性」（自己のキャリアへの取り組み姿勢が自律的であるか）、「計画性」（将来展望を持ち、自己のキャリアについて計画的であるか）という、3つの態度特性（下位尺度）を設定している。

各系列の調査項目は27項目（3下位尺度×9項目）となり、「1＝全くあてはまらない」～「5＝よくあてはまる」までの5段階評定法で回答させた。

図表1 キャリアレディネス尺度（CRS）の構成

系 列 領 域	人生キャリア・レディネス (Life Career Readiness:LCR)	職業キャリア・レディネス (Occupational Career Readiness:OCR)
キャリア関心性 (Career Concern)	①人生キャリア関心性 (Life Career Concern)	①職業キャリア関心性 (Occupational Career Concern)
キャリア自律性 (Career Autonomy)	②人生キャリア自律性 (Life Career Autonomy)	②職業キャリア自律性 (Occupational Career Autonomy)
キャリア計画性 (Career Planning)	③人生キャリア計画性 (Life Career Planning)	③職業キャリア計画性 (Occupational Career Planning)

2) 希望職業の決定状況調査

「あなたは将来就きたい仕事（職業）を決めていますか」という質問に対する回答として、「1つに決めている」、「いくつかに絞り込んでいる」、「まだ決めていない」を設定し、いずれか1つを選択させた。

(3) 手続き

キャリア成熟については、職業と人生の2系列のキャリア・レディネスの中の3つの下位尺度ごとに、該当する項目の得点を合計した。それらの合計得点を「職業キャリア関心性得点」、「職業キャリア自律性得点」、「職業キャリア計画性得点」などと呼称することとした。また、希望職業の決定状況調査の選択した回答によって、上記の順に、「決定群」、「複数選択群」、「未決定群」と名付け、対象者を3つの群に分けた。

3. 結 果

(1) 希望職業の決定状況の変化

図表2にあるように、116人中、1年次調査においては、46人が「決定群」（39.7%）で、48人が「複数選択群」（41.4%）、22人が「未決定群」（19.0%）であった。それが、2年次調査においては、24人が「決定群」（20.7%）、72人が「複数選択群」（62.1%）、20人が「未決定群」（17.2%）となっている。この変化を全体でみると、「決定群」が46人から24人へと約半分に減少している一方で、「複数選択群」が48人から72人へとちょうど1.5倍に増えている。

続いて、群ごとに変化の様子をみてみよう。

まず、1年次調査における「決定群」が2年次においてもそのまま「決定群」であったのは、わずか37.0%（17人）にすぎず、他の63.0%（29人）は「複数選択群」か「未決定群」へと移行している。また、1年次調査の「複数選択群」をみると、77.1%（37人）がそのまま「複数選択群」である。2年次に「決定群」へ移行したのは10.4%（5人）であった。そして、1年次に「未決定群」で2年次もそのまま「未決定群」の人は31.8%（7人）であり、他の群へ移行したのは7割弱であった。

図表2 大学生の希望職業決定状況（1年次と2年次の比較）

		2年次			合計	
		1つに 決めている (決定群)	いくつか 絞り込んでいる (複数選択群)	まだ 決めていない (未決定群)		
1 年 次	1つに決めている (決定群)	人数	17	22	7	46
		%	37.0	47.8	15.2	100.0
	いくつかに絞り込んでいる (複数選択群)	人数	5	37	6	48
		%	10.4	77.1	12.5	100.0
	まだ決めていない (未決定群)	人数	2	13	7	22
		%	9.1	59.1	31.8	100.0
合計		人数	24	72	20	116
		%	20.7	62.1	17.2	100.0

注：無効回答1人

(2) 1年次と2年次のキャリア成熟の差

1年次と2年次の間でキャリア成熟の程度に差異があるかどうかをみるために、各得点について平均値の差の検定（t検定）を行った。それらの結果を、図表3から図表6に示す。

2-1) 全体

図表3に示したように、検定の結果、統計的に有意であったのは、「職業キャリア関心性得点」（1年次：33.21→2年次：34.37）と「人生キャリア関心性得点」（1年次：32.93→2年次：34.11）である。両得点とも、1年次の平均よりも2年次の平均の方が有意に高いことが判明した。

図表3 キャリア成熟の変化（1年次と2年次の比較）

			M	N	SD	t	df
1	職業キャリア関心性得点	1年次	33.21	117	6.499	-2.267*	116
		2年次	34.37	117	5.105		
2	職業キャリア自律性得点	1年次	34.83	117	5.182	.898	116
		2年次	34.47	117	4.219		
3	職業キャリア計画性得点	1年次	27.23	115	6.339	1.060	114
		2年次	26.70	115	5.990		
4	人生キャリア関心性得点	1年次	32.93	117	6.287	-2.216*	116
		2年次	34.11	117	5.738		
5	人生キャリア自律性得点	1年次	33.96	116	5.294	1.663	115
		2年次	33.34	116	4.804		
6	人生キャリア計画性得点	1年次	27.31	114	6.608	.666	113
		2年次	26.94	114	6.127		

(注) * $p < .05$ 両側検定

2-2) 群別

①決定群

図表4にあるように、「決定群」では、「職業キャリア自律性得点」（1年次：36.48→2年次：34.91）、「職業キャリア計画性得点」（1年次：31.29→2年次：28.80）、「人生キャリア自律性得点」（1年次：35.13→2年次：34.00）, および「人生キャリア計画性得点」（1年次：30.87→2年次：28.24）の平均が1年次よりも2年次の方が有意に低いことが明らかになった。

図表4 「決定群」のキャリア成熟の変化（1年次と2年次の比較）

			<i>M</i>	<i>N</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>df</i>
1	職業キャリア関心性得点	1年次	34.33	46	5.641	-.421	45
		2年次	34.67	46	5.865		
2	職業キャリア自律性得点	1年次	36.48	46	4.026	2.857**	45
		2年次	34.91	46	3.943		
3	職業キャリア計画性得点	1年次	31.29	45	4.934	2.634*	44
		2年次	28.80	45	6.434		
4	人生キャリア関心性得点	1年次	33.30	46	5.887	-.843	45
		2年次	34.04	46	6.139		
5	人生キャリア自律性得点	1年次	35.13	46	4.655	2.080*	45
		2年次	34.00	46	4.993		
6	人生キャリア計画性得点	1年次	30.87	45	4.808	3.263**	44
		2年次	28.24	45	7.281		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$ 両側検定

②複数選択群

図表5に示したとおり、「複数選択群」では「人生キャリア関心性得点」（1年次：33.10→2年次：34.65）の平均だけが1年次よりも2年次の方が有意に高い，ということがわかった。他の得点はいずれも有意ではなかった。

図表5 「複数選択群」のキャリア成熟の変化（1年次と2年次の比較）

			<i>M</i>	<i>N</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>df</i>
1	職業キャリア関心性得点	1年次	33.58	48	5.874	-1.489	47
		2年次	34.60	48	4.523		
2	職業キャリア自律性得点	1年次	33.88	48	4.350	-.773	47
		2年次	34.29	48	3.886		
3	職業キャリア計画性得点	1年次	26.10	48	5.574	-.274	47
		2年次	26.27	48	5.258		
4	人生キャリア関心性得点	1年次	33.10	48	5.605	-2.037*	47
		2年次	34.65	48	5.285		
5	人生キャリア自律性得点	1年次	33.32	47	4.354	.476	46
		2年次	33.02	47	3.859		
6	人生キャリア計画性得点	1年次	26.57	47	6.050	-.434	46
		2年次	26.94	47	5.215		

(注) * $p < .05$ 両側検定

③未決定群

図表6から、「未決定群」では「職業キャリア計画性得点」（1年次：20.90→2年次：23.10）の平均が1年次よりも2年次の方が有意に高いことが判明した。

図表6 「未決定群」のキャリア成熟の変化（1年次と2年次の比較）

		<i>M</i>	<i>N</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>df</i>	
1	職業キャリア関心性得点	1年次	30.23	22	8.641	-2.018	21
		2年次	33.14	22	4.734		
2	職業キャリア自律性得点	1年次	33.09	22	7.540	-.534	21
		2年次	33.77	22	5.442		
3	職業キャリア計画性得点	1年次	20.90	21	4.381	-2.505*	20
		2年次	23.10	21	4.918		
4	人生キャリア関心性得点	1年次	31.45	22	8.291	-.830	21
		2年次	32.64	22	5.568		
5	人生キャリア自律性得点	1年次	32.55	22	7.558	.215	21
		2年次	32.36	22	6.004		
6	人生キャリア計画性得点	1年次	21.19	21	6.501	-1.993	20
		2年次	23.76	21	3.910		

(注) * $p < .05$ 両側検定

4. 考 察

第1に、希望職業の決定状況の変化をみると、1年次に「1つに決めている」（決定群）と回答した学生の約6割強が2年次にはそれ以外の群に移行していることが判明した。つまり、このことは、1年次から2年次にかけて学生自身、将来の職業選択について「迷い」は始めているということの意味しているのではないだろうか。また、学生は大学に入学してから、さまざまな体験を行うなどして、将来の職業について「現実吟味」（reality testing）をしている最中にあるとも考えられる。同時に、このように学生が1年次から2年次にかけて「迷い」は始めるのであれば、初年次学生をも対象に含めたキャリア・カウンセリングが必要である。松井ら（2005）は、大学卒業生を対象にした調査で「就職全般に関する相談（カウンセリング）」が大学時代に少なからず「必要だった」という回答率が約9割に上ることを明らかにしている。この実態からも、さらなるキャリア・カウンセリングが大学において必要であるといえよう。

第2に、1年次と2年次のキャリア成熟を比較すると、「職業」と「人生」の2系列ともに、「関心性」が有意に高まっていることが判明した。これは学年進行とともに就職活動（職業選択・決定）の時期が近づいてきているから、「関心性」も高まったのであろうと考える。その一方で、2系列ともに、「計画性」に変化が見られなかった。つまり、学生たちは、時間の経過とともに、確かに将来のキャリアに対する関心は高まるが、具体的に目標を立てて、それを達成するための計画をどのようにしたらいいのか、明確になっていない、とも考えられる。ここにおいても、キャリア・カウンセリングをはじめとした学生支援を実施することが重要である。

第3に、群別にキャリア成熟の程度を検討すると、特徴的なことが「決定群」においてみられた。すなわち、この群では「職業」と「人生」の2系列ともに「自律性」と「計画性」が有意に低下している、ということが判明した。この背景として、前述のとおり、1年次で「1つに決めている」と回答した者のうち6割以上の学生が、2年次にはそうでなくなっているという事実がある。また、他の2つの群については、有意差が見られたのは1つずつであり、1年次から2年次にかけてキャリア成熟全体をみるとそれほど大きな変

化はない，ということが明らかになった。

今後は，さらに継続的（縦断的）に大学生のキャリア成熟に関するデータを収集・分析し，その結果から，大学4年間のキャリア教育実践プログラムを開発していくことが必要であろう。

文 献

- 安達 智子 (2006) 「大学生を対象としたキャリア教育の試み — 自己効力と結果期待の変化」 『日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集』 172-173.
- 江利川良枝 (2012) 「大学生の主体的なキャリア選択とその支援 — キャリア教育プログラムの立案と検討 — 」 『人間関係研究』, 11, 129-144.
- 松井 賢二 (2004) 「大学におけるキャリア教育の必要性」 『第22回日本進路指導研究セミナー論文集』（日本進路指導学会主催），78-83.
- 松井 賢二 (2006) 「大学におけるキャリア教育の必要性 — 調査結果から考える」 『日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集』, 31.
- 松井 賢二 (2008) 「大学におけるキャリア教育プログラムの実践とその効果」 『教育実践総合研究』（新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要），7, 123-140.
- 松井 賢二 (2009 a) 「大学におけるキャリア教育の効果」 『教育実践総合研究』（新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要），8, 81-93.
- 松井 賢二 (2009 b) 「大学におけるキャリア教育の効果（Ⅱ）」 『新潟大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）』, 2(1), 65-77.
- 松井 賢二, 近藤フヂエ, 山岸 雅夫, 五十嵐久人, 高橋 桂子, 森下 修次 (2005) 「大学におけるキャリア教育：就職活動の実態から考える」 『新潟大学教育人間科学部紀要（人文・社会科学編）』, 7(2), 233-251.
- 三川 俊樹 (2008) 「大学におけるキャリア教育 — 3年間の『キャリアデザイン論』（選択科目）を振り返って」 『追手門学院大学教育研究所紀要』, 26, 43-63.
- 森山 廣美 (2007) 「大学におけるキャリア教育 — その必要性和効果測定の見座から」 『四天王寺国際仏教大学紀要』, 44, 309-319.
- 坂柳 恒夫 (1996) 「大学生のキャリア成熟に関する研究 — キャリア・レディネス（CRS）の信頼性と妥当性の検討」 『愛知教育大学教科教育センター研究報告』, 20, 9-18.

（付記）本研究は，平成20年度～23年度科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号：20530766（研究代表者：松井賢二））による研究の一部である。